

まえがき

立木 教夫

道徳科学研究センターは2010（平成22）年度の開始に当たり、統一テーマを「『道徳科学の論文』を現代によみがえらせる試み」とし、2012（平成24）年度末まで3年間、このテーマのもとに研究を集中していこうという計画を立て、道徳科学研究センターゼミとモラロジー研究発表会で、各3回ずつ、計6回、発表を行ってまいりました。

スタート当初から、3年後には研究成果をまとめ、『モラロジー研究』に特集を組んで成果を公表しよう、と呼びかけてきました。今回、各研究員がそれぞれの専門的視座から「『道徳科学の論文』を現代によみがえらせる試み」にチャレンジし、論文をまとめてくれましたので、無事「特集号」を出版することができました。投稿論文は多岐にわたっていますが、廣池千九郎が構想した道徳科学の広範かつ豊かな内容を反映したものとなっています。

*

当初、統一テーマをこのように設定したことについて、『道徳科学の論文』（以下、『論文』と略す。昭和3年初版発行、昭和9年訂正増補第二版発行）は、現在、社会教育の場でテキストとして使われ、多くの人々が『論文』を通して道徳的気付きを得られたり、道徳実践の手がかりを得られたりしているのだから、現代によみがえらせるまでもなく、現に生きているのではないか、という声もありました。しかし、われわれが「現代によみがえらせる」というテーマで意図したことは、そういうことではありませんでした。

『論文』は、初版出版以来すでに85年（昭和3年から平成25年の間）の時間が経過し、その間に『論文』の立論に用いられた多様な学問は、大きく変貌を遂げています。

われわれが意図したことは、研究的観点から『論文』の学術的側面に焦点を当て、各専門分野の成果と発展を概観しながら廣池の道徳科学との接点を探り、廣池が試みた路線を発展させることで、『論文』を現代によみがえらせようとするものでありました。

道徳科学研究センターにはさまざまな学問分野の専門家が集っていますので、各研究員がそれぞれの専門的観点から『論文』を吟味し、それぞれの問題意識に引き付けて現代の知識と連結させることができたなら、興味深い研究成果が得られるだろうと考えて提案したところ、賛同を得て3年間のプロジェクトがスタートしたのでした。

われわれは『論文』は古典として受け継ぎながら、『論文』に関する研究を集積していくことで、廣池の研究路線を継続的に発展させていこうと考えたのです。また、『論文』が「古典」として読み継がれていくためにも、その時代の学的状況とどのような関係にあるのかを明らかにしていく必要があります。

『『道徳科学の論文』を現代によみがえらせる試み』というテーマは、これからもさまざまな専門家の協力を得て、幅広く継続的に取り組んでいかなければならないテーマであると確信しています。今回の試みをスタートとして、これからも新たな研究成果が続々と蓄積されていくことを楽しみにしています。